〈医は意なり〉攷
——医学思想的観点から——

舘野正美

いわゆる〈医は意なり〉という一句については、既に先達が詳細に論究するところであるが、わずかに先達の言及に外れた文献もあり、また医学思想の観点から見て、やはりいささか論述すべき点もあるように見受けられる。以下、時代を追って論究してゆきたい。

既に先達も指摘する通り、この〈医は意なり〉という一句の最も古い用例は、『後漢書』「郭玉伝」に見出されるそれであろう。

その一句は、名医郭玉の神技とも言うべき医術のきわめて微妙な要訣を〈神は心手の際に存す〉という、一種さとりにも似た境地として記述する脈絡中に存している。

そこで注目すべきは、その一文中の〈解すことを得るべくも、言うことを得るべからざるなり〉という一句であると考えられる。すなわち、郭玉がその父でやはり名医であった涪翁のもとで医術の修行を積んで体得した、一種神技の如き治術は、やはり相当の鍛練を積んで、みずからこれを体現する以外にその真髄を〈解する〉方法はないのであり、日常的な言語の表象作用によって伝達可能な対象とはなりえない、つまり〈言うことを得るべからざるなり〉だと言うのであるが、正にこの〈言うことを得るべからざるなり〉という点にこそ、郭玉の医術、延いてはこの〈医は意なり〉という一句の医学思想的な意味における真骨頂があるものと考えられるのである。

つまり、この〈言うことを得るべから〉ざるところの〈意〉とは、要するに、かの『易経』「繫辞上伝」の〈書は言を尽くさず、言は意を尽くさず〉という、中国古代思想に淵源する、一種の伝統的な言語観を記述する典型的な一文における〈意〉という語彙の概念を踏襲するものであったと思われるのである。

要するに、易とは、さまざまな鍛練を通じて、一種〝非日常〟の境地において体現されるところの〈言（ことば）〉にならない人間存在の真実を、いわゆる六十四卦の象徴体系において表象し敷衍してゆこうとする占いの一形態であり、その本来の形態における易占の〈意〉（＝真意）は、やはり〈聖人〉といわれるほどの卓越した人物でなければ的確に理解することができず、いきおい〈言は意を尽くさず〉と言われるに至る、というのである。

そこで翻って、『後漢書』「郭玉伝」にいわゆる〈医の言為（た）るや意なり〉の〈意〉とは、『易経』「繫辞上伝」におけるそれの意味内容を踏襲して、長年に亘る鍛練を通じて体得された医術の真髄としての〝真意〟の謂いであり、決して恣意的な、全くその場限りの意見の意味ではありえないと思われる。中国の古典文献には、それなりの意味体系としての語彙と概

念の脈絡があり、中国の古典的な文章の表現は、常にこの線に沿った形で行なわれていたと考えられるからである。

かくして、このような医学思想の表現としての、この〈医は意なり〉という一句が、更に新旧両『唐書』の「許胤宗伝」や『金匱玉函経』・『備急千金要方』等の諸文献において見出されるのである。

ところで、戦国時代の程本という人物に仮託される『子華子』の中にも、以上と同様の内容を伝えると目される記述が見出される。

そこでは、〈医は理なり。理は意なり〉という表現になっているが、この一文が、いわゆる〈医は意なり〉の医学思想と全く同一の脈絡中にあることは、既に明白であろう。『子華子』の成書年代には問題もあり、かつこの一句自体も、先秦時代の他の書物のいずれにも見出せないものではあるが、ちょうど『易経』の「繫辞上伝」が編纂されつつあった頃、その言語観を敷衍するところの、この一文が書かれたであろうという可能性は、十分指摘するに足ることであると思われるのである。

いずれにせよ、このいわゆる〈医は意なり〉という一句は、古く中国古代思想に濫觴を浮かべる医学思想を表象するものであったと考えられるのである。

ところでまた、更に我が国江戸時代の吉益東洞も、この〈医は意なり〉の一句について、かなりの言説を残している。この一句は、日本においても、早に『医心方』において引用され、相当の注目を集めていたことが窺われるのであるが、その日本における受容の実際を見ると、日本の医家たちに独特の考え方なども見受けられ、これまた興味深いものがあると思われるのであるが、その論究は割愛したい。

（平成十年十一月例会）

❋❋❋ 紹　介 ❋❋❋

大星光史著『文学にみる日本の医薬史』

著書、大星光史氏は富山医薬大における小生の同僚であり、かつ俳句の師匠である。大星氏は東北大学文学部国文科のご卒業で、本学で日本文学を講じておられる。

これまでに、『漂泊俳人の系譜』『愛しき歌びとたち』『日本文学と中国老荘思想の研究』などの著作があるが、このたび医療思想を文学作品の中に探り出す研究の成果を『文学にみる日本の医薬史』として上梓した。

本書は、文学者と医学者集団が共存する世界に著者が身を置いた特殊な状況から生み出されたもので、今更ながら学際領域の大切さを実感させられる。

その内容は、日本書紀、古事記の世界から始まり、万葉集、源氏物語、日本霊異記、今昔物語、徒然草に到り、更に中世から江戸の文学作品、あるいは作家その人の健康記録等を網